

繰り返される大統領の報復

「貴族たちは、いくつかの派閥に分かれ、互いに執拗な憎悪をぶつけ合っている。しかし、彼らの党派は、なんら政治的、行政的原理を異にするものではなく、ただ尊厳だとか、職務上の影響力のみを言い争っている大義名分だけのものである。朝鮮における最近三世紀の期間は、ただ貴族層の血なまぐさい不毛の争いの単調な歴史にしかすぎなかった」

李朝末期の厳重な鎖国体制下の朝鮮に潜入し、居住した唯一の欧州人集団がパリ外邦伝教会所属の数名のフランス人宣教師であった。彼らは後に、拘束、処刑されるのだが、それ以前にパリの教会に朝鮮の政治社会の諸相についての通信文を頻繁に送っており、これを素材にして書かれた資料的価値の高い文献がシャルル・ダレの『朝鮮事情』である。前掲の文章はここからの引用である。

弾劾により大統領を罷免された朴槿恵氏がソウル中央地裁による1審判決で、懲役24年、罰金180億(約18億円)を言い渡され

韓国民よ 政治危機に覚醒せよ

た。予想されていたこととはいえ、韓国という国家の特異な政治文化について改めて思い知らされている。前政権の悪を徹底的に暴いて現政権の統治の正統性の証しとするというのが、この国の政治の伝統的なやり口なのである。

李明博元大統領が逮捕されたのは3月下旬である。独立後の韓国の大統領は、李承晩氏以来、現職の文在寅氏を除いて11人だが、その末路は、暗殺、拘束、自殺を含めて悲劇的なものがほとんどであった。儀式化された政治的報復というべきものであろう。

「党争」は李朝時代から続く。李朝時代以来、この社会においては富も名譽もその源泉はすべて中央の政治権力にあった。それゆえ中央権力を求め、各集団がしのぎを削る「党争」が李朝時代を通じて恒常的に展開されてきた。朝鮮は文治社会である。党争の

正論



拓殖大学学事顧問
渡辺 利夫

手段は武力ではなく理論であった。儒学の解釈をめぐり自らを正統とし他を異端として抹殺しようとするイデオロギー闘争であった。その分、党争は怨讐と遺恨を含む抜き差しならないものとなり、いつ果てることもしない長期戦の様相を呈したのである。

李朝時代の高級官僚は「両班」といわれ、極め付きの難関である「科擧」に合格した一握りの秀才たちである。この官僚群が国王を支え国家統治がなされてきた。道の長官に始まり地方の末端に至る

首長のすべてが中央から派遣される官僚によって占められ、彼らが地方の支配者となった。この制度により地方に根を張る権力集団の出現は阻止された。二百数十の藩主が多様な地方権力を形成し、各地方の行政、産業、文化を担った日本の幕藩体制とは対照的な、極度の中央集権的体制が李朝であった。

像されるかもしれないが、実態はその逆である。中央集権が極度に進められたがゆえに、多様な利益集団や社会集団の形成がその芽を摘まれてしまった。唯一残されたものが、宗族と呼ばれる男子単系の同族的集団である。この宗族が門閥となって両班を輩出する母体である。李朝には社会を横断的につなぐ階層はついぞ存在しなかったのである。

復であり、李朝の党争への先祖返りである。困ったことに韓国民が文氏この政治的姿勢を強く支持している。旧政権の権力者をパッシングする文氏の立ち居振る舞いは、国民にとっては「悪魔祓い」であるかのよつに映じ、その姿勢に爽快な気分を味わっているのである。ポピュリズムである。